

お吟さま

今 東光



講談社オンデマンドブックス

弱よろ法ほう師し

お吟さま

目次

157

5

お吟さま

その一

お三人目だから、お三さまとお呼び申しておりますが、お小さいときにはお亀さまと申上げましたそうで。

お吟さまと申上げますが、女は氏あつて名が無いのでござりますから、家方ではお三さまで通つて居りました。

御主人のお吟さまとは御同年でござりましたので、河内国若江郡の沼べりの村から、はるばると御奉公にありましたときは、誰しものように泣き明した夜もござりましたが、お吟さまづきとなつて朝夕かかずき、お給仕やら、御召換えやら、御入浴と御介添え致しますうちに、御むつび合う間柄となつて、お次の間に休ませて頂くほど御不憫を御かけ下され、いつとなく御心のたけなど御打ち明け遊ばされるほどになりました。まことに不思議な仕合せでござりまして、平戸渡りの瑠瑠の櫛やら簪やら、見たこともない御頭の御飾り物から、美しい御小袖、金糸銀糸で縫取りした御帯など鷹揚にたまわり、泣き明した夜のことなど遠い夢のように忘れて仕舞つたことでございます。

秋の夜更けなど間の御襖を閉めさせたまわず、夜のふけるおもしろさに何時までも御寝遊ばされず、生国の御物語を御せがみなされ、間近に聳える生駒山の山裾にひろがる河内野を、うねうね

と蛇のようにうねり曲って流れる大和川という大河と、それに添うて数えきれぬほどの沼やら池やら、その間に点綴する村々の、とりわけて古の歌垣にもくらべられる夏の夜の踊りのおもしろさ。

「その唄を聞かせてたもれ」

と御せめ遊ばし、枕にうつぶせになって低い声して

人と契らば

浅くちぎりて

末とげよ

もみじ葉を見よ

濃きがまず敷る

もの候

と歌ってお聞かせ申しますと、ほとほと御感心遊ばされ

「河内者は情知りよの」

と仰せられたのであります。その御言葉がいかにも感に堪えて聞きましたので、はっとしてお吟さまのお顔を御見あげ申しますと、短檠の灯影に背らを御むけなされましたが、ありありとお顔をお染め遊ばしたかにかがえたのでござります。それからは一入お情を蒙りましてござります。

朋輩の大方は泉州生れが多うござりましたが、河内者も少くはござりませんで、いちばん年若

なところから御不憫がかかりましたものでござりましようか。

屹しかとしたことは存じませぬが、大宗匠様の御母堂とやらは、遣明船けんみんぶねの末吉丸とか申す大きな御舟を御所持なされた河内国平野郷の末吉様から御興おこし入れ遊ばされた由ゆに承うけたまわつてござります。平野郷では末吉家やら御一族の成安家やら大分限だいぶんげん者でござりまして大宗匠様の御舎弟ごしやていにあたらせられる宗巴そうは様の御娘も成安家の道慶みちひら（桂）様の、いずれば嫁御寮よめごりやうとの御約束とか洩もれ承うつてござります。御当家と河内との御因縁ごいんねんの深いのは、あらましこのような次第でござります。それゆえ奉公人も殊ことのほか河内者を召し寄せられる趣おもきに承うつてござりません。隣国との深い御誼おんよしみは、ただ格式とか、氏素姓うじすじやうとか、財宝の多寡たかばかりでござりませぬそうな。永祿えいりくの頃とか承うりましたが、御上洛遊かばした織田様から堺津へ対して、何でも難しい儀を御持ちかけ遊ばされ、御会合おんえごう三十六人衆や、納屋なや十人衆など頭立かしらだたせられた御方々も、二万貫文の矢銭とやらに御運も尽き果てたと思召めされ、櫓うを築たき、堀ほりを深かうし、菱ひしの実をまいて御合戦の御用意のとき、女子供の足弱はともかくも河内国に落し参まらせたそうにござります。その代り生駒山の峯たかねつづき、信貴しぎの御城にこもられた松永まつなが彈正だんじやう様の御合戦の砌かまりには、さしずめ河内野が御合戦場と相成ありましたので、河内の御親戚ごしんせきが和泉いずみへ立ち越こえて、御当家へも御避難ごひなんあそばされたかに承うつてござります。これも戦国のならいでござりましようか。

河内国は御存じのごとくに海と申すものがござりませぬ。わたくしなども沼よりほかには見も知らぬ村落そらに生ない立ちましてござりまするので、深野ノ池など世の中にこれほど大きな池は他に

あるまいものと存じてござりました。それが御当家に召し使われましてからは、潮干狩やら住吉詣やらと、果てしも知らぬ海原うなばらというものを見せて頂きましてござりまする。井戸の中の蛙かわずという譬たとえがござりまするが、まこと河内野の青蛙かわけが海を見たのでござりまするので、ただ驚きあきれるばかりでござりました。とりわけ御親族の納屋衆の御一方おひとかたと承りましたルソン助左衛門すけざえ様と仰おほせられる御方様が、遠い南の海を越えてルソン島ろんじま（フィリッピン群島）から堺津へお帰り遊あそばした時と、エスパニヤの南蛮船なんばんぶねがこの港へ入った折のことは忘れることが出来ませぬ。ともにも大砲を打ち鳴らし、華やかな御上陸なされるのを、大勢の人々と共に櫺子窓れんじまどから垣間かいま見たこととでござりました。

南蛮船のカピタン様と仰おほせられる船長ふなおさは、御会所の御招きの後、御当家の茶湯に招じられて御越つむりしなされました。背の高さは六尺有余もござりましようか。白磁のような白い肌をされ、お頭かぶの赤毛は御仏のように縮れて、御鼻は曲かまった鉤鼻かぎばなで、御眼の玉はビードロのように青く澄んで凝じつと見つめられると身がすくむように存ぞんぜられました。それが黒羅紗くろらしゃの異様な御服装にモールが燦然さんぜんと輝きらき、シャポーという冠かぶり物を召まされました。御書院に御通りなされ、御長持ひもろせんに緋毛氈ひもろせんをかけたのへ御腰をかけられ、人の生血いきちのような赤い御酒ごしゆを下くだされましたが、お吟さまは大層御意ごいに召ました御様子でギヤマンの高坏たかづきでなみなみ一杯召ましあがられましたと、お吟さまはわたくしにもと一杯、頂戴ちやうたいいたしました。河内では孕はらみ女に鯉こいの生血を吞くませますが、その生臭せいくさいい匂においも思い出しますと、何やら胸がつかえて御遠慮ごえんりょつかまつりましてござりまする。